句集

月見草の宵

堀越霞林子

秋叢書第十八篇

句集

堀越鶯林子

秋発行所刊

著者略歴

堀越鶯林子 1917年3月埼玉県大里郡妻沼町大字弥藤吾に父数太郎、母いくの4男として生る。
本名敬紀（けいき）。拓殖大学政治経済学部政治科卒業。
拓殖大学大学院経済専攻。
「秋」同人。埼玉県俳句連盟理事。妻沼町文化連合副会長。妻沼町俳句連盟会長。著書に句集寒卵。
現在妻沼町議会議員。監査委員。（副議長、総務商工各委員長歴任）。法務省人権擁護委員。財団法人井田育英会専務理事。関東印刷株式会社取締役社長。

秋叢書第18篇
利根の章

昭和50年3月20日　印刷
昭和50年4月1日　発行

著者
発行人　堀越鶯林子
埼玉県大里郡妻沼町大字弥藤吾1853
電話　0485（88）0282番
発行所　秋発行所
東京都文京区小日向1の8の21
振替東京　64411
電話　03（943）3051番
印刷所　関東印刷株式会社
埼玉県大里郡妻沼町大字弥藤吾595
電話　0485（88）2115番

定価1,500円

目次

奔流と逆さ波……石原八束…3
昭和十五年～昭和二十年
白木蓮……10
虹の輪……24
雁来紅……40
長門の硯……52
昭和二十一年～昭和三十年
花の塵……70
街小春……81
昭和三十一年～昭和四十年
春の海……88
秋日燦々……101

昭和四十一年～昭和四十五年
早乙女……110
鵜は影ひいて……117
菊膾……123
餅臼……131
昭和四十六年～昭和四十九年
桜海老……138
春かもめ……151
極光……162
瑞巌寺……175
短日……191
あとがき……201

題字　会田綱雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

奔流と逆さ波

石原八束

「奥の細道」の北陸小松多太神社での芭蕉作、

むざんやな甲の下のきりぎりす

は、その小松の近く、片山津の湖岸で戦死した斎藤別当を主題にした謡曲、「実盛」を踏まえた作であることは、すでによく知られてゐる。この句集「利根の章」の著作者堀越氏は、むかし、この実盛の領地であった北武蔵利根河畔の妻沼（めぬま）の俳家である。妻沼に生れ、妻沼の文化向上のために今も尽力してゐる篤実な人士である。

妻沼はむろん女沼のことだから、この周辺に男沼、女沼といった大小の沼があったことが知られる。つまり、この大利根河畔の低地には、いくつもの大小の沼があり、更に蓮田があり、その蓮の花の中に、関東ではひろく知られた妻沼聖天を置いて考へると、粋で潔よい庶民像が次第にそこに浮んで来るやうに

思はれるがどうかしら。

それはともかく、この句集にはこの利根川や妻沼聖天を詠った作は仲々多い。同時にそれらの作の中には、生きのいい、男らしい著者の人間像がいたるところで脈搏ってゐる。その一つ、

直情にかけし生涯鰯雲

といった佳品には、著者のその性格が、何はばかるところなく明快に打出されてゐるのを見るだらう。俳人といふと、小市民型の人の好い小人物が、これは私をも含めて、一般に多いのだが、堀越氏は、この点では型破りな程に剛直な大人物なのである。善意のその行動は、上州の空ッ風に吹き鍛へられて、赤心灼くがごとしといったはげしい積極性をもってゐる。集中に、

ゆさゆさと桑束負うて闇に入る

といった句がある。別に、

小つむじの移れる麦を踏みにけり

といった句もある。更に、

ばった遊ぶがら空き電車に乗りにけり

といった句も出てくる。これらはいづれも著者堀越氏の重厚な、或はその反面にあるひょう逸な自画像である、と言って先づ間違ひあるまい。さうして、

霧奔流かげりとなって湖に飛ぶ

月明の草川渡り穴惑ひ

石仏の蓮台焦し野を焼ける

ダム見えて低き軒端の眼白籠

枯尾花怒濤となりて月昇る

疣のある零余子それぞれ貌をもつ

聞き耳を鶏がそぶりや雁来紅

蟬しぐれおさん泣かすなの天守閣

等々の佳品にも、その情景の中に、或は、その作の寓意象徴するものに、紛ふかたない堀越氏の人間が潜んでゐる。さうした自画像の示すきっぱりとした人柄の面白さは、さすがに見事といふほかはない。

なほ、著者が直接「利根」を詠った佳品のいくつかを引いて、この句集の主題の一端を示せば次の通りである。利根への関心を離れては、やはりこの句集を語ることはできまい。

烏帽子とり万歳利根の舟に乗る

鷺舞ふや利根の畷の田づくろひ

鷺とめて冷す牛あり利根薄暮

夕焼や坂東太郎の逆さ波

鶏頭や利根の漁師の網手入れ

水汲みに船女房や鰯雲

（昭和五十年一月記）

句集

利根の章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

白木蓮

虹の輪　昭和十五年

雁来紅　昭和二十年

長門の硯

作

白木蓮

囀りの聖天山や蘇る

春めくや縄目新たの葡萄園

白木蓮に火山灰（よな）降る朝のしじまあり

上野東照宮　二句

蒼天の風をさまりぬ梨の花

梨花白く江戸の伽藍の古びたり

春蘭を瓶に生け置く鄙の家

東海道清水の辺り

残雪の富士へ遮断機おろさるる

海苔干すや浜辺の千鳥まろびをり

沈丁花ふふむ窓なり宿をとる

警戒警報下

遮蔽して旋盤（ぼんこ）に春の灯をかざす

麦踏むや男体氷るごと聳てる

雪鎧ふ火の山背なに麦を踏む

尾長鳥鳴き交ふ庫裡や梅日和

畦の梅大き入日を犬と来し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c